



理事会だより (4・13)

一、会長より、新年度最初の桜まつり俳句大会が無事に終了した事への御礼と引き続き各俳句大会ほか会の運営協力への要請があった。

二、桜まつり俳句大会について、取り掛かりから大会実施・実施後の関係先への連絡・欠席者への送付など終了した旨事業部より報告。

三、定期総会議案書案につき総務部長より説明があり、総会に備えることになった。

四、その他 ①各部は今年度も引き続き同じメンバーで取り組む②今年度会員数は三名減の百五十五名の見込み③会費納入は四月末までに④理事懇親会を四月二十七日総会後に行う予定。

第69回定期総会 4月27日、出席20名委任状33名にて成立し、事業報告・計画、決算・予算につき審議・承認された。

「俳句おだわら」10句抄 (668号より)

新井たか志 抄出

ぼろ市の防空頭巾火の匂ひ
冬満月千支の兎が飛び回る
鎌倉や天下静まり春の海
鳶の意気空へ漲る出初かな
一月も半ばの雨となりにけり

井戸端の禿びし束子や春隣
鷹鳩と化して改稿仕上げけり
紅梅にこころ乾いてゆくばかり
荒星の我も一つや誓子の忌
一番に顔出す勇氣路のとう

小澤園子 抄出

冬満月千支の兎が飛び回る
日向ぼこ天国というガラス窓
春だ春マンボウに乗り旅に出ん
てふてふが銅のこゑす枕許
子等の声枯野に色を加へたる
石鱈玉お玉じゃくしが生れさう
春の蚊やATMと人差し指
鶉には小鳥インフルエンザかな
猪走るうぐいす餅のような山
経済も支那支那してて弥生かな

尾崎 一夫

長谷川きよ志

加藤まり子

陌間みどり

池田 忠山

中根 和子

村場 十五

木村 和彦

小林永以子

岡田 典代

長谷川きよ志

小瀬村信子

伊藤 道郎

佃 悦夫

出澤 洋子

小島ノブヨシ

瀬戸 正洋

大石 雄介

大石 和子

柴田 礼子

第76回小田原桜まつり俳句大会

事前投句の兼題「桜又は花、猫の恋」に対し一七二名五六八句。四月二日当日の部に六九名の参加を得て小田原市民交流センターに於て二月の梅まつり俳句大会に続き四年ぶりに開催した。なお配布の作品集の賞は2位から4位は正しくは左記の通り。訂正願います。

兼題入賞作品

神奈川県知事賞

夜桜やしるながすくじらがうねる

大石 雄介

小田原市観光協会会長賞

山門を出で恋猫となりにつけり

高橋久美子

小田原俳句協会会長賞

恋の猫恐竜図鑑踏みゆけり

畠 梅乃

以下俳句協会賞（二十位まで）

牛飼の白き長靴朝桜

大島美恵子

恋猫の凱旋月を従える

伊藤 道郎

一村は老人ばかり猫の恋

日高 朝代

路地の闇使い果して猫の恋

田畑ヒロ子

尼寺の裏手が修羅場猫の恋

池田 忠山

初花や町医者までの身繕ひ

須田 晴美

指先に残る酔の香や花の昼

豊田 幸枝

猫の恋真つ赤なポリシエ疾走す

田畑ヒロ子

猫の恋薄目開けてる六地藏

加藤まり子

ぼくの恋猫の恋よりいそがしい
ピカソの絵一瞥したる恋の猫
手に馴染む志野の肌や夕桜
声変りきざす少年猫の恋
とらへたる落花を風に戻しけり
満開の花の中なるひとりかな
あの声がまさか家の子猫の恋
朝ざくら肺のうらまで息吸へり

選者特選賞

（小田原俳句協会名誉会長）佃 悦夫特選

神仏もとびこして行く恋の猫

神山つとむ

（小田原俳句協会顧問）大石雄介特選

角ばつた犬やつてくる山桜

寶子山京子

（小田原俳句協会会長）池田忠山特選

母逝きて姪の生まるる桜かな

守屋 まち

（青梅俳句会代表）

田中幸子特選

掛軸を替へるひと日や初桜

若村 京子

（おほる俳句会代表）

小野菊土特選

さくら咲く駅や行く人送る人

唐木 孝年

（鹿火屋俳句会代表）

近藤久江特選

満開の花の中なるひとりかな

神山つとむ

当日題入賞作品（席題「春季雑詠」）

小田原俳句協会会長賞

ものの角みなとれてゆく花の昼

(以下二十位まで)

ぶらんこ漕ぐ背に翼が生えるまで

字余りを生きるわたしは蜃気楼

墓だけの残る故郷こぶし咲く

つくしんぼ子はいつまでも子ではなく

遠足の列全員が橋の上

うぐひすや水やわらかく菜を洗う

野遊びや髪に衣に日の匂ふ

窓際のメトロノームや花の雨

犬ふぐり日差しに揃ふ膝小僧

笑ふ娘に妣の面影花菜風

栄転も左遷も同じ春の道

桜満つ誇れるものに大家族

花の雲天守に人の吸はれゆく

いぬふぐり顔認証に失敗す

大谷の繰り出す魔球風光る

雛の客男の子五人の畏まる

頭を寄せて俳句の鬼が花に酔ふ

自販機の働らいてゐる花月夜

(小田原市長賞は入賞者本人の申出により投句取消となりました。)

星 一義

加藤かほる

杉山あけみ

西岡 青波

陌間みどり

守屋 まち

田畑ヒロ子

次田 磯美

新井たか志

荒 理依子

日高 朝代

奥村 ゑこ

青木 勝子

中根 和子

岡田 典代

石黒 和風

裕 百合子

近藤 久江

長谷川きよ志

新作5句

加藤 まり子

田打つや空一面を裏返し
ものぐさとなりて籠るや春炬燵
春寒し埋葬許可書懐へ
白足袋の桶につけ置く春の水
誰にでも秘密は少し花菫

加藤 春江

晩熟の味をあじわう春みかん
寂しさを見すかされてる桜はなに会う
行く春や体力の保持杖は仲間
ウクライナ異空間なる春園遊
葉桜や抜き差しならぬこと捨てる

大沢 年子

軽トラに農具積みたり風青し
親しげに寄り来る猫や夏来る
手作りのマフィンの香り燕来る
見送りて手を振る婆や春日傘
春の蚊の叩きそこねて夢現

大木 敬子

教室に笑ひ満ちたり夏は来ぬ
庭眺めつまむ苺や夫待ちて
さくらんぼ何の予定もなき日かな
たこ焼の店の名「あほや」夕薄暑
牡丹や寺の墨龍生きてをり

令和4年度事業報告

〈主催及び主管事業〉

- 1) 第75回小田原桜まつり俳句大会
コロナウイルス感染拡大防止の為、第一部(兼題の部)作品募集のみ実施。
兼題:桜又は花、雲雀 投句者170名270組
- 2) 第三回藤田湘子記念小田原俳句大会
4月16日 小田原三の丸ホール
応募作品 一般の部1,444句 小中学生の部1,623句 参加者320名
- 3) 秋の吟行会 大磯郷土史料館 11月8日 担当 広報部
当日囁目3句 総互選 参加者21名
- 4) 令和4年度小田原秋季俳句大会
10月2日 小田原市民交流センター(UMECO)
第一部(兼題の部)作品募集「新涼」「木槿」投句者157名247組
第二部 コロナウイルス感染自粛により中止
- 5) 令和5年2月4日立春青空句会 小田原城址公園 天守閣広場
小田原市観光協会同席のもとセレモニーの後、短冊吊り実施。
13時よりそびそ会場にて句会実施。 囁目3句総互選 参加者17名
- 6) 第59回小田原梅まつり俳句大会
2月5日 小田原市民交流センター(UMECO)
第一部(兼題の部)作品募集「梅」「日脚伸ぶ」投句者153名 249組
第二部 春季雑詠、当日発表席題(鶯餅)各1句総互選、参加者64名

〈後援事業〉

第45回笛まつり俳句大会・みなみ俳句協会

第一部 作品募集のみ実施 兼題「笛・道」「桔梗」

第12回おおいゆめの里俳句大会(町立そうわ会館)おほる俳句会

令和5年3月4日 兼題「野遊び」「春灯」

〈その他の事業〉

1. 作品展示

小田原城址公園(春夏秋冬) 担当 近藤久江

2. 協会報特別配布

市立図書館(中央・東口)・生涯学習センターけやき・尊徳記念館・郷土文化館・小田原文学館
生涯学習センター国府津学習館・小田原市観光協会・川東タウンセンターマロニエ・小田原
箱根商工会議所・神静民報社・神奈川新聞社県西総局・UMECO・小田原駅前観光案内所

令和5年度事業計画

〈主催及び主管事業〉

- 1) 第76回小田原桜まつり俳句大会 小田原市民交流センター(UMECO)
4月2日(日)
第一部(兼題の部)作品募集「桜又は花」「猫の恋」
第二部 春季雑詠(2句)
- 2) 秋の吟行会 場所・日時未定 担当 会計部
- 3) 令和5年度小田原秋季俳句大会
10月15日(日) 小田原市民交流センター(UMECO)
- 4) 令和6年2月4日(日) 立春青空句会
場所 小田原城址公園 天守閣広場 句会 そびそ二宮
- 5) 第60回小田原梅まつり俳句大会
令和6年2月10日(土) 小田原市民交流センター(UMECO)

〈後援事業〉

第46回笛まつり俳句大会・みなみ俳句協会

第13回おおいゆめの里俳句大会・おほる俳句会

令和 5 年度小田原俳句協会役員一覧

名誉会長 佃 悦夫

顧問 新井たか志

大石 雄介

会長 池田 忠山 (担当・全般、広報部、総務部)

副会長 長谷川きよ志 (担当・事業部) 山田 照子 (担当・会計部)

〈専門部理事〉○印部長 ・次長

総務部 ○佐々木重満 ・岡本史郎 近藤久江 宮崎悦女 伊藤はる子
菅野英余

事業部 ○長谷川きよ志 木村幸枝・須田聡子(梅まつり事務局担当)

(兼)加藤かほる(桜まつり事務局担当)

米山 翠(秋季大会事務局担当)

小野菊土・田中幸子・田畑ヒロ子(事務局アドバイザー)

岡田典代 守屋まち 若村京子 中根和子 芹澤常子 瀬戸りん

広報部 ○村場十五 ・齊藤 桂 田下昌人

会計部 ○寶子山京子 ・加藤かほる 陌間みどり

理事 青木勝子 青木たけを 秋山 昇 一ノ瀬茂代 伊藤道郎

大石和子 小澤純子 小澤園子 加藤まり子 神山つとむ

木村和彦 小島ノブヨシ 西賀久實 佐宗欣二 杉崎せつ

瀬戸正洋 瀬戸 悠 竹下由里子 田渕令子 出澤洋子 豊田幸枝

鳥海壮六 中根登美子 中村昌男 畠 梅乃 山崎悦子

〈監査部〉川本育子 杉山あけみ

新入会員 高杉掘三朗(こよろぎ) 高橋千代子(鷹)

武居裕美子・松下俊之(沈丁) 柳川紀枝(みなみ) 星一義(山北)

退会会員 井上良子 関根琉子 高橋正子 中野文子 尾崎竹詩 中山妙子

石田和代 國島五月 鈴木久美子 井上和子

俳句おだわら(4・19メ切り、到着順)

◆小田原鹿火屋(3・24)

久江報

潦すがしふるさと初燕

足立 和子

花冷や水面に揺らぐ角櫓

川本 育子

雨催ひ花散り初めし憂ひかな

高橋 小糸

城目指す十羽の鳩や花の中

山崎 悦子

勢子の意の操るまに野火奔る

近藤 久江

◆山北(3・23)

由里子報

検診の受付すます黄水仙

和田恵美子

造り酒屋の塗り換えた壁四月来る

尾崎 幸子

飛鳥佛の笑み待つ寺やげんげ道

星 一義

足元の犬の温みや春の雨

石田加津子

ペーパーミルと杉花粉症沸騰中

竹下由里子

◆春野(3・19)

きよ志報

梅咲いて眠れる村が動き出す

秋山 昇

朝刊の読まざるままの春炬燵

伊藤はる子

窮屈な絆なりけり花馬酔木

内田知江子

寺町の寺から寺へうかれ猫

尾崎 一夫

朧夜やボンボンの酔ひまなうらに

瀬戸 悠

美容師に髪をあづけて春眠し

二見 和江

同胞の老いさまさまや山桜

長谷川きよ志

◆沈丁(4・6)

寶子山報

陽に染まず白木蓮の空に立つ

若村 京子

白木蓮黄昏どきの無垢の白

柳澤ミサ子

大沢の風に靡くや紫木蓮

田中 恵一

病院の木蓮の花窓ごしに

河本 純子

白木蓮なんとも鳥の似合うこと

瀧本 敦子

青空を押し上げて咲く白もくれん

勝木 澄子

紫木蓮手話で伝へる「花が咲く」

菅野 英余

野テューブルの落花てんでんおもてなし

高井 幸子

春雷や呪いかけて探し物

片野 節子

紫木蓮壊れた器継ぎもよう

峯尾ユキエ

手つかずに群れなすセリや沢のふち

河本チヨ子

走りきる笑顔の先にはくれんよ

清水美代子

雪解の沢水得たり蟹の脚

松下 俊之

ただそこにあるだけでいい紫木蓮

武居裕美子

生乾きのやうな空です紫木蓮

寶子山京子

◆みなみ(3・17)

かほる報

菜の花の匂いぶつかる野の小径

加藤 富江

薄味の味噌汁老父に目刺し焼く

加藤れい子

空に星野に蒲公英の生まれけり

加藤 健治

菜の花や朝粥ふんわり椀に盛る

市川めぐみ

芽柳や絹のスカーフゆるく捲く

豊田 幸枝

一連の目刺しに藁のうすみどり

斉藤 静

葱坊主風にゆらゆら楽しそう

小瀬村信子

カーテンを開ければ細き春の月

柳川 紀枝

平仮名を学び初めし児チユウリップ

加藤かほる

◆おほる(4・12)

秀泰報

快き午後の日溜まり花は葉に

香川 花子

高原の土壌の誉春キャベツ

加藤 春江

雪柳泪のやうに零れ初む

横塚 昌平

草餅の湯気の向こうにちちとはは

小野 菊土

花杏ふるさと遠くいまも過疎

瀬戸とみ子

はらからの声の寄り合う草の餅

中根登美子

マスク外り人目気に成り花の下

中津川晴江

風光る弟支え半世紀

二上 光子

旅心そつと擽る春の風

高橋みどり

花吹雪こころの闇を解きけり

中村 昌男

濃く淡く刻の流れる藤の下

石井千代子

せせらぎの音にふくらむ花菜かな

石井きよ子

蒲公英の旅立つ構え風を待つ

廣田 悦子

交差点親子手を取り入学式

風間 秀泰

◆香雨・梅ごち(3・26)

忠山報

また一つ齡かさねて初桜

肥後ちさこ

車窓より愛でつ仰ぎつ花の雨

関戸わよこ

単線の一両電車山笑ふ

青山 典子

ランドセル夢でいつぱい一年生

門松 鳳文

ひと気なきわんぱくランド花の雨

吉田 百代

放牧の牛の鳴く声山笑ふ

吉田 康雄

春雨や色を違へて木々の梢

陌間みどり

吟行の句帳の湿り花の雨

小澤 純子

いきいきと雨に咲きみち丘ざくら

池田 忠山

◆こよろぎ(4・13)

つとむ報

卒はる日の恩師のことば水温む

高杉掘三朗

スイトピー東ねて並ぶ無人店

板谷 雅泉

無住寺となりて久しや沈丁花

植松テル子

足柄の峰おほひたる斑雪はだれかな

神山つとむ

◆たけのこ(4・5)

悦女報

厨事帰り待つ夜の菜種梅雨

三木 泰子

春耕や余生を土に癒されて

小宮 早苗

夕桜水面にうつるぼんぼりと

徳田 公子

風光る袴の少女溢れをり

久津間百合子

半分は読めぬ碑文の春彼岸

宮崎 悦女

◆実のり(4・12)

たか志報

園児たち皆んな仲良し芝桜

岩本ひさみ

トンネルの貫通式や百千鳥
新緑や溪水滾る養魚場

柏木 良花
庄司 下載

新築の庭にひと株芝桜

杉本 久子

春潮の藍かたりべの継承者

瀬戸 りん

まちかどのピアノのねむる養花天

木村 幸枝

産院の看貫秤蝶の昼

高橋久美子

絵手紙の思ひびつしり芝桜

新井たか志

城跡の松の貫禄鳥雲に
いぬふぐり空の欠片の色もらふ

中山智津子

◆青梅(4・12)

幸子報

碧空に幸せ撒いて燕舞う

大塚 行人

夕空に月の細しよ木の芽和

芹澤 常子

白さぎの水平飛行豆の花

湯本とし子

味噌汁も白子たつぷり田子の浦

大木 敬子

畑打つや足柄山に背を押され

加藤まり子

指貫に執す和裁士花の頃

大島美恵子

菜の花の一群映える休耕田

久保寺トミ子

一不動二釈迦五地藏山笑ふ

田下 昌人

掘り返す鋏になじみし春の土

田淵 令子

土塊を鋏に砕くや春の雷

中根 和子

余寒なほ独り暮らしの長電話

田中 幸子

内庭の葉越しに見ゆる春月夜

加藤 幾代

◆鷹(4・7)

十五報

駄菓子屋に猫の子囀む声朗ら

青木 孝子

貸し傘を置きある駅や隴月

守屋 まち

朝明けに飛ぶ白蝶の地に近し

池田 令子

船おりて島の溶岩路紅椿

米山 翠

採血のあとの絆創膏山笑ふ

西賀 久實

心地良きジャズを流して暮春かな

來田 新子

匕首となり翡翠川へ突つ込めり

佐宗 欣二

点滴の終ひの日なり春の空

大沢 年子

つばくらやラジオ高鳴る金物屋

須田 晴美

春泥や掃きし玄関よごす靴

片野 秋子

オフロード駆くる車や花辛夷

中田 笑子

熊よけの鈴のデュエット山笑ふ

小林 環

春雨や貫入美しき主茶碗

百川 秀子

河原にてラッパ吹きたり黄水仙

下平 美子

菜の花の土手埋めつくす夕べかな

山崎美知子

沿岸に遊漁船出づ雁帰る

鳥海 壮六

茄子植うる馴染みの山に見守られ
春泥や建築許可の表示板

古屋 徳男

◆草むら(4・18)

重満報

夢違観音ふと現はるる臙かな
いちぶしじゅう鳶の見ている春の浜
春愁やあの古民家の松いづこ

北村 文江

水やりや攫わぬやうに蝌蚪の水

石井 秀稀

人事と思えぬ話蝶蝶よ

井上 和子

狂犬になることをせむ桜時

佃 悦夫

鹿尾菜舟漢の背の撓るかな

佐々木重満

◆零(4・20)

史郎報

黄水仙心のように揺れやまず

青木たけを

誰かれと糸電話せん臙の夜

伊藤 道郎

ふとぶとした青ネギに坊主顔出した

川合 昌子

薄墨のしなやかにゆれ一本桜

佐藤 正子

背が伸びてたんぽぽはもう一年生

中村 裕子

湘南ゴールド広がる春嶺風る海

野川木一路

春光や偽証濡れ衣無罪なり

岡本 史郎

◆無所属

やつと鳴る雀の鉄砲十本め

小林永以子

水温むなんでも真似るみそつかす

一ノ瀬茂代

耳朶に真珠ひとつぶ卒業す

島 梅乃

暁や初音に揺らぐ軒雫

出澤 洋子

気だるきは年老ふごとの花曇

大佐田うづき

使はざる筋力のありつくしんぼ

山田 照子

春宵はきみが満ちてる一途なり

穂坂志げる

吹流しよよと解けて真昼かな

山本 すみ

じゃがいもを植えたりサンバめく日和

杉山あけみ

さるのこしかけ遠くで人の声がする

大石 雄介

春だ春川のしつぽが遊んでた

大石 和子

蠅生る娑婆の馳走に手を合せ

小島ノブヨシ

体うごかぬ黄砂来るミサイルも

杉崎 せつ

ジーンズの穴も個性やハルジオン

岡田 典代

四月尽依怙地になつてみたもの

瀬戸 正洋

理不尽を覆いつくして花吹雪

木村予史重

☆俳人協会カレンダー☆

夕されば風の操る文字摺草

川本育子(五月)

蓑宮 わか

吉田 百代

田中 恵一

下平 美子

若芝や転がるように老いし猫
登校児列なし行くや猫柳
風光る車窓に飛んで酒匂川
我影に姿勢正せし日永かな
老翁の歯並び白し桜餅

啓蟄や園児手洗ひ自噴井
散策の尊徳堤揚雲雀
蝶蝶や「めだかの学校」の歌碑
一世紀御感の藤の穂波かな
火神鳴ヘルメット着け児の帰る

父と子の野鳥観察若葉風
静けさや武家屋敷あと風薫る
茶葉むらす程よき加減新茶かな
打水に誘はれるやう旅の宿
埋めつくす人・人・人の揚花火

新制中学一ト日の学び杉植林
杉の苗学徒植林全校で
煙る程舞いたる花粉令和かな
かたばみの荒れ地に伸びて花清し
眼球の曇りで無いぞ黄砂降る

小田原俳句協会

〒二五〇〇〇二二 小田原市本町二一三一二

池田 忠山方

俳句おだわら鑑賞

石井きよ子

(令和5年2月号)

おしゃべりも一緒に加えおでん鍋 市川めぐみ
掲句には、日常の何気ない風景が見えます。家族が集い、一日の出来事などを話しながら鍋を囲む。あるいは仕事仲間との風景かもしれません。いずれにせよおしゃべりは欠かせないのです。「黙食」などという歓迎できぬ言葉が出て来たここ数年。人が集い、おしゃべりしながら食事をするのがいかに大切な痛感させられました。幸せとは正にこのような風景を言うのでしよう。

大島美恵子

(令和5年2月号)

野にひびく程の嚏や畑仕事

久保寺トミ子

午前中の一時間ほど近場をウォーキングしている。この時期春耕の準備作業の人を見かける。そこを歩いている私。突然大きな嚏が聞こえる。本人も体裁悪そう、そして私もびっくり。一瞬足が止まるが何事もなかった様に歩き出す。そんな光景を楽しく想像、共感した。そして嚏は一回だけで願う。

理事会日程

5 / 11 6 / 8 7 / 13

(毎月第二木曜日 けやき十五時開催)